

第3章 事業所と養護学校高等部教員の意見の比較

－ 送出し側と受入れ側の意見の相違 －

前回調査（以下、95年度調査）では、送出し側である学校と受入れ側である事業所との間に連携がある場合に、両者の意見は一致しているのか、異なっているのか、また、異なっているのであればどのような点で異なっているのかについて検討した。なお、95年度調査では送出し側である学校の意見を中学校特殊学級、養護学校中学部、養護学校高等部のそれぞれの最終学年の担任もしくは進路指導担当の教員から得た。その結果、送出し側である学校の意見も必ずしも一致しているわけではないこと、その一方で、「働くこと＝就労」が時期においても内容においても、最も現実的な課題である養護学校高等部の教員の意見と事業所の意見は知的障害者の雇用に関して概ね一致していること（詳細は、調査研究報告書 34を参照）が明らかとなった。

具体的には、一般就労を実現するための8領域96課題並びに6課題47項目に関して、個々の課題または項目について比較すると両者の間には統計的に有意な差が認められる場合もあるが、領域内あるいは課題内でどのような順で達成を期待するかという並び順についての意見は事業所と教員では概ね共通していた。したがって、どのような課題をどの順番で達成していくことが必要かについての意見は一致していると考えられる。また、「期待される仕事の出来高」に関しては、養護学校高等部教員と事業所の意見との間に統計的に有意な差は認められなかった。これに対し、「不良品の発生率」に関しては、両者の間に有意差が認められ、事業所の要求水準は養護学校高等部教員よりも高いことが明らかとなった。このように一部に意見の相違が認められるものの、連携のある学校と事業所の意見は、多くの点で共通しており、このことが知的障害者の雇用を支える要因の1つになっていると考えられる。

これに対し、今回の調査対象となった事業所は知的障害者の雇用経験がなく、第2章で検討したことを踏まえれば、送出し側である学校との間にも意見の相違が認められることが予想される。そこで、第3章では、95年度調査の学校関係者の中から養護学校高等部教員の意見を取りだし、知的障害者の雇用経験のない事業所との比較を通して、両者の意見の相違を明らかにする。

第1節 養護学校高等部教員の概要

回答のあった養護学校高等部教員（224名）のうち90.6%が就職指導を経験していた。また、教育経験6年以上が全体の78.5%を占めて（表3-1）おり、回答した教員は「知的障害者に関する知識」を有し、かつ、「企業が期待すること」についても一定の理解をしていると考えられる。

表3-1 回答のあった教員の概要

その1	性別 (%)			担当学年 (%)					就職指導担当経験 (%)		
	男性	女性	不明	1年	2年	3年	その他	不明	あり	なし	不明
養護学校高等部 224名	82.1	17.4	.4	2.2	9.4	72.8	.9	14.7	90.6	8.5	.9
その2	知的障害者教育経験年数 (%)						回答者の年齢				
	1～5年	6～10年	11～15年	16～20年	21年～	不明	平均値(S. D.)	人数			
養護学校高等部 224名	21.0	34.8	26.8	12.9	4.0	.4	40.7 (6.8)	222名			

第2節 一般就労を実現するための課題（その1）

- 8領域96課題に対する意見 -

1. 領域別にみた意見の相違

一般就労を実現するための8領域96課題に関して雇用経験のない事業所と養護学校高等部教員（以下、高等部教員）の間で意見が異なるかを²検定を用いて検討した。

表3-2 事業所と養護学校高等部の回答傾向に差が認められた項目

日常生活について	職業生活について	意思の表示について
トイレが一人で利用できる 食事のマナーが守れる 身なりを整えられる 身辺を清潔にできる 整理・整頓ができる 病气やけがの予防ができる 病气やけがに対処できる 一人で食事の支度ができる 一人で掃除や洗濯ができる 余暇がうまく過ごせる	目印で自分のものが分かる 自他のものが区別できる 物を無断で持って行かない 道具を使ったら必ず返す 順番や交代の意味が分かる 仕事で騒いだりしない 整理・整頓ができる 共同の道具を大切に 約束を守る 決まりや礼儀を守る 指示を受け入れる 素直に注意を聞く つそや言い訳をしない 工夫して仕事する 積極的に作業に取り組む まじめに仕事をする むやみに休まない 怠けたり手抜きをしない 仕事は、責任を持ってやる できないときにごまかさ 辛抱強く仕事をする ねばり強く仕事をする 気に入らない仕事に耐える 反復作業に耐える ぶげずに仕事をする 仕事に無駄話をしてない	話す相手と視線をあわせる 自分の気持ちを表現できる 感情を出さない時が分かる 相手の気持ちが分かる 聞かれれば、上司に話す 見聞きした事を上司に話す 順序をたどって話す 仕事が終わったら報告する 簡単な伝言をする 電話や来客の取り次ぎをする 上司などに簡単な伝言をする 名前を呼ばれたら返事をする 電話の対応を知り利用する 話分からないときは聞く 作業が分からないときは聞く 依頼や訴えをする 要望や不満などを表わす 指示や説明を正しく聞き取る 説明を聞いて内容が分かる 話し合いで、意見も述べる 自分の意見を分かるよう話す 聞き手の方を向いて話す ていねいな言葉を使える 時と場に応じた適切な対応 立場をわきまえて対応する
協調性について	職業に関する知識について	一般的な知識について
身近な人にあいさつをする 「ありがとう」「ごめんなさい」 場に応じたあいさつをする 他人に協力する 他人の協力を受け入れる 場の雰囲気分かる 自分勝手な行動をしない 人に迷惑をかけたときに謝る 人の失敗や過失をとがめない 助けられた時、謝意を表わす	職業の名前が言える 仕事の分担や協力が分かる 仕事の責任が分かる 自分の担当が分かる 職場の組織が分かる 基本的労働条件が分かる 保険などの制度が分かる 履歴書など手本を書き写す PESOなどの役割が分かる	119番や110番が分かる 警察署などの働きの分かる 水、電気、ガスなど大切に使う 諸届などの意味が分かる 諸届などの記入が分かる よく使う外来語が分かる 選挙の意味が分かる
作業について		
作業内容の変更をすぐ覚える 準備、後片づけができる 道具などを正しく使う 道具などの管理や手入れ 道具などを大切に扱う 道具などを注意して運搬する		
自分の特徴について		
向いている仕事分かる やってみたい仕事分かる 得意・不得意分かる		

: 1%水準で有意 : 5%水準で有意

その結果、96課題中82課題において回答傾向が有意に異なることが明らかとなった（表3-2，図3-1～図3-8：図は領域内において養護学校高等部教員が「必ずできなくてはならない」と回答した率の高い順に並べた）。以下に領域毎の特徴をまとめる。

（1）日常生活について

『日常生活』では、10課題中「トイレの利用」を除く、他の9課題において回答傾向に有意な差が認められた。これらの課題では、いずれも事業所の「できなくてはならない」への回答率は高等部教員の回答率を上回った。また、「できなくてはならない」に関してその並び順を比較すると両者の意見は一致していた（図中：1%水準で有意：5%水準で有意であることを示す。また、課題は高等部教員が「必ずできなくてはならない」と回答した率の高い順に並べてある）。

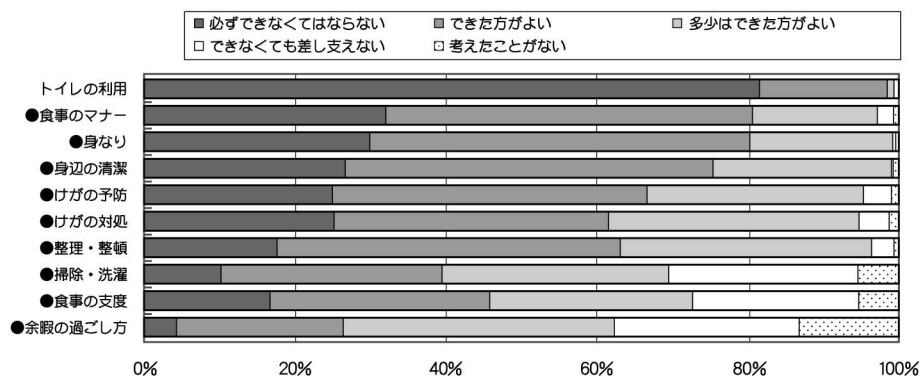


図3-1(a) 日常生活（事業所）

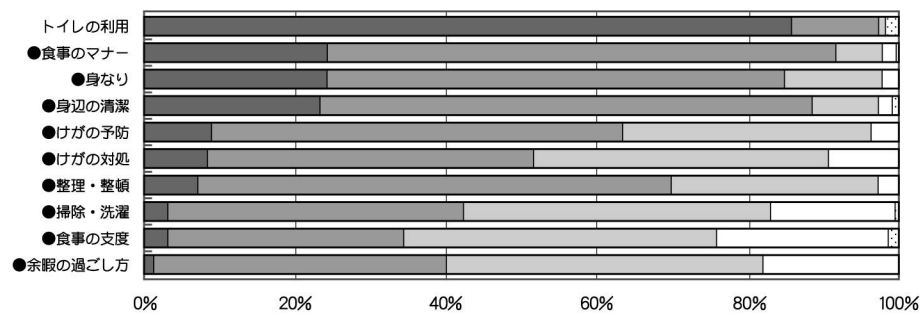


図3-1(b) 日常生活（高等部教員）

次に「できなくてはならない」に「できた方がよい」を加えた回答率に注目すると有意差の認められた9課題中6課題において高等部教員の回答率が事業所の回答率を上回った。ここから、事業所では就労時に「（必ず）できなくてはならない」と考え、高等部教員は「できた方がよい」と考えていることがわかる。

（2）職業生活について

『職業生活』では、26課題中18課題において回答傾向に有意な差が認められた。